



写真右から、大平さん、糟谷さん、本田さん、吉田さん。

未来を描く！ 創る！  
イノベティブな  
生徒たち

第8回

社会課題に  
取り組む高校生に  
必要なマインドは？

## 「本気で遊ぶ」気持ちで、 町の様々な課題を請け負う！

### 「まち部。」

糟谷 遙<sup>かすや はるか</sup>さん(3年生) / 本田和花奈<sup>ほんだ わかな</sup>さん(3年生) / 大平彩代<sup>おほひら さやか</sup>さん(1年生) / 吉田歩花<sup>よした あゆか</sup>さん(1年生)

奈良県・大和高田市立高田商業高校

**魅**力的な地域資源を掘り起こして発信したり、地域資源を活用した特産品の開発をしたりするなど、生徒が町の様々な課題に取り組む奈良県・大和高田市立高田商業高校の「まち部。」。「部」と名乗ってはいませんが、ほかの部活動のように固定の部員が定期的に活動するわけではなく、プロジェクト単位の活動をベースとしており、プロジェクトごとに参加する生徒は異なる。現在、「まち部。」が抱えるプロジェクトは11件。生徒が立ち上げたものもあれば、企業や団体から持ち込まれたものもあり、延べ約100人の生徒が参加中だ。プロジェクトの内容は多種多様。1年生の大平彩代さん、吉田歩花さんが取り組むのは、コロナ禍で販路を失った野菜を売ることで農家を助けるとともに、その収益の一部を、大和高田市の姉妹都市で、100年に一度の豪雨に見舞われたオーストラリアのリズモー市に寄付するプロジェクトだ。3年生の本田和花奈さんは、SNSによる地元青果店の広報活動の支援に取り組み、同じく3年生の糟谷遙さんは、大手コンビニ

読者の先生方がご存じの「イノベティブな生徒たち」をご推薦ください！

ご推薦いただける場合は、右の2次元コードをスマートフォン等で読み取っていただき、フォームに沿ってご推薦内容をご入力ください。



## 教師たち



奈良県・大和高田市立高田商業高校進路指導部としたが大島利隆

### 社会を変える経験を高校時代に積ませたい

社会には解決が簡単ではない問題がたくさんあります。だからと言って高校生は無力なのかというと、そうではありません。むしろ、できない理由をまずは考えてしまう大人よりも、高校生は大きな可能性を持っています。ですから、「まち部。」の活動を通して生徒に知ってほしいのは、世界は自分たちの手で変えられるということです。「まち部。」の生徒が根気強く活動に取り組めるのは、問題の解決そのものが楽しいからです。学校の名物を全国に知ってもらうために、新商品を大手コンビニエンスストアに提案した生徒たちは、「コンビニが駄目なら、次はピザチェーンにあたろう」と、次の策を考えていました。それこそまさに「本気の遊び」です。遊びのように楽しんでいるから、生徒はアイデアを次々に生み出し、「駄目なら次へ！」と常に前を向いて、この社会を変える活動を続けられるのです。

「高田商業高校には、新入生の歓迎行事として、上級生がすき焼きを作り、新入生に振る舞う伝統があります。2年前に『まち部。』の先輩が、そのすき焼きをレトルト化して販売を始めましたが、私たちはレトルトすき焼きの知名度を上げようと、コンビニエンスストアの本部に『牛すき焼きおにぎり』の企画を持ち込みました」（糟谷さん）

プロジェクトは、どれも実社会と結びついたものばかり。当然、想定通りには進まないこともあるし、苦勞も多い。野菜の販売では、農家から送られてきた野菜を、どうすれば鮮度を損なわずに保管・販売できるか、ということが頭を悩ませた。青果店の広報活動では、若い世代が実際にお店に足を運んでみようと思わせるものにするため、何度も投稿内容の修正を繰り返した。「牛すき焼きおにぎり」の開発では、プロジェクトに参加する生徒間で意見が分かれながらも、「おいしさ」という答えが1つではない問いに向き合った。

かかわる人の数が増え、その人たちの立場が多様になればなるほど、意見が衝突することも多くなるが、それでも生徒たちが頑張り続けることができるのは、自らの意思で参加したプロジェクトだからだ。担任の教師から、「今度、こんなプロジェクトが始まるよ」と紹介されて、興味を持った人だけが参加する。そもそも、「まち部。」への参加自体が自由だから意欲を持って最後まで取り組めると、生徒たちは口をそろえる。「高校に入学して『まち部。』で活動を始めた時、担当の大島先生が『このモットーは、「本気で遊ぶ」だよ』とおっしゃいました。もちろん、一緒に活動する校外の方々に失礼があつてはいけません、高校生の私たちは、失敗を恐れず、遊ぶような気持ちで、楽しみながらいろいろな経験を積んでいくことが大切なのだと思っています」（大平さん）

町に出て、町を知った高校生は、社会には見過ごせないたくさん問題があることに気づく。そして、教師や町の人々と一緒にそうした問題の解決に取り組む中で、「未来」をよりよく変えていくための力を身につけていく。いや、「未来」だけではない。生徒は、「今」も変えていくのだ。



2022年6月、コロナ禍で販路を失った長芋とごぼうを販売する生徒の様子。姉妹都市に約12万円の寄付金を送ることができた。

### 学校プロフィール

**設立** 1954（昭和29）年  
**形態** 全日制／商業科／共学  
**生徒数** 1学年約200人  
**2021年度進路実績（現役のみ）**  
 国公立大は、金沢大、長崎大、横浜市立大、大阪公立大などに37人が合格。私立大は、中央大、明治大、同志社大、関西学院大などに延べ141人が合格。短大・専門学校進学38人。就職29人。